地域力パワーアップ大会

～若者の力で地域をおこす～

日　時　平成２８年６月２６日（日）１３時３０分～１６時００分
場　所　松山大学　カルフール・ホール
主　催　松山市（市民参画まちづくり課）
後　援　松山市教育委員会
目　的　松山市では、住民主体のまちづくりを推進するため、地域活動を行う町内会や公民館、地区社協、ＰＴＡなど各種団体や個人・企業等を、ゆるやかなネットワークで結ぶ住民自治組織「まちづくり協議会」の設立や運営支援を行っている。

大会を通じて「まちづくり協議会」とは何か、その取り組みを分かりやすく紹介し、市民に広く知ってもらい、地域のまちづくりについて考える機会となるよう開催する。

出席者

≪松山市≫

野志市長、西泉副市長、唐崎市民部長
髙田市民部副部長、市民参画まちづくり課職員１０名

≪来　賓≫

松山市議会議員　市民福祉委員会委員		清水尚美　氏
同上		池田美恵　氏
松山市公民館連絡協議会	副会長	永原　修　氏
松山市地区社会福祉協議会連絡会	会長	上原光代　氏
松山市地域協働団体連絡会	会長	池田秀雄　氏
松山市自主防災組織ネットワーク会議	会長	吉金　茂　氏
松山市小中学校ＰＴＡ連合会	顧問	杉原美由紀　氏

≪事例発表≫

堀江地区まちづくりコミュニティ会議　事務局長　長尾真二　氏
清水地区まちづくり協議会　学生活動局長　小並優斗　氏
ＮＰＯ法人松山大学学生地域創造研究所Ｍｕｓｅ　事務局長　宮岡真由子　氏

≪意見交換≫

上記事例発表者３名
松山市コミュニティ・アドバイザー　讃岐幸治　氏

若松進一　氏
前田眞　氏

来場者　　約２００名
総合司会：藤井美穂（市民参画まちづくり課）
一部、二部司会：三浦梨佳（桑原地区まちづくり協議会　学生部）
同上　　：西川宗徳（同上）

プログラム

１．開会挨拶（野志市長）

２．来賓紹介

３．大会目的・プログラム紹介

４．オープニング「まちづくり１０年の歩み」

・松山市とモデル地区「堀江地区まちづくりコミュニティ会議」の１０年の歩みを振り返り

５．第一部　事例発表

◆堀江地区「子どもにだってできるまちづくりはある」

・「ほりえゆめくらぶ」の活動紹介
・子どもの力を活かしたまちづくり
・大人が用意した子どもを楽しませるイベントだけではもったいない。受け手ではなく、まちづくりのパートナーへ。
・将来を担う子どもたちの夢やアイデアを取り込めているか。
・子どもが参加すると活動に活気が生まれ、子どものために地域がまとまる。
・ふるさとで愛された子どもはふるさとを愛する大人になる。
・子どもの力だけではまちづくりはできない。
・すべての人に居場所があり、出番のあるまちこそ、生きがいや幸せを感じるのではないか。

◆清水地区「学生が地域と関わる」

・何より、松山、愛媛が大好き
・松山に愛着や誇りを持つため、何をすればよいのか。
・金沢市の学生によるまちづくりを紹介

・視察では、学生が金沢を愛していて、地域は学生を愛していることを一番感じた。また、やっていて楽しいということを大事にしていた。
・視察後、まずは自分たちのまちを知ろうということで、まち歩きを実施した。
・住民と学生の交流の場をつくっていきたい。
・みんなが助け合えるまちをつくりたい。隣に住んでいる人も思いやれるまち。
・まちを自分のものと思えるようにしていきたい。

◆Ｍｕｓｅ「六つの志～夢を追いかける私たち～」

・社会貢献事業として、過去９年にわたり県内の札所２６ケ寺の手書きイラストや英語版の遍路マップを制作。
・ペットボトルを回収し、発展途上国の子どもたちにワクチンを届ける「キャップで愛を届けよう事業」の取組。
・えひめ愛フード推進機構との連携事業で県産農産物を使用したスイーツコンテストのレポートや試食取材を行う「愛媛スイーツプロジェクト事業」の取組。
・市教育委員会主催の農業体験や地域文化を学ぶ「ぽんぽこ村支援事業」の取組。
・「六つの志」はＭｕｓｅ結成時からの活動ポリシー。やらされているという義務感でやるのではなく、自分たち自身がやりたい、楽しいと思いながら積極的に活動できるような団体にして、後輩に引き継いでいきたい。

６．第二部　意見交換

コーディネーター：前田眞アドバイザー

●事例発表の感想

（若松アドバイザー）
・若さは年齢ではなく、心が若いかどうか。
・感想として、堀江地区の発表にある「ふるさとで愛された子どもは、ふるさとを愛する大人になる」ということを実感している。子どもも地域活動の主要メンバーであることを考えれば、子どもたちをどう引き込むかということは大事になる。
・２つの学生の事例は、さすが若い人の力があり、思いもつかない取組。しかし、地域との連携がもっとあった方が良い。これから、地域との関わりをどう持つのかを考えてもらいたい。
・Ｍｕｓｅの六つの志があるが、この真ん中に「地域」を入れてもらうと、地域に勇気を与え、情熱を与えるなど、キーワードが増えていく。

（讃岐アドバイザー）

・若者、馬鹿者、よそ者でないとまちづくりはできんということがあるが、視点が違うということ。ついつい自分の感覚で見るが、若い新鮮な目で見ると違った視点で見えるので、視点を変えてみるということがこの大会のテーマになったと思う。

・地域に若者が入ってきたときには３つがない。「たまり場がない」「楽しみがない」「助け合いが出来る場所がない」

・自分が必要とされてなかったら居心地が悪い。必要とされると安心してできる。

・心配してくれる人がいることが大事。今は関わる力が欠けているため、これをおこしていかなければならない。

・発表では、自分のためのまちづくりで、地域のつながりは見えてこなかった。

・今まで学んできたことを応用する場所として地域がある。関わっていくことで自己への理解が深まる。地域の課題への理解が深まってくる。この３つが重なると知の創造化がおこる。

・学生の活動はすばらしいが、今後の課題としてまちづくり協議会との関係をどう作っていくか。

●多様な人たちの参画について

（堀江）

・ＰＴＡやおやじの会、みらいくらぶなど、若い世代の人たちに集まってもらえるような居場所をつくる。

・愛媛マラソンのコースに堀江地区が入ったので、楽笑会という団体ができ、走る人、応援する人が、マラソンだけでなく地域のために何かしたいと思うようになった。

・いろんなアプローチで関心を持ってもらった人に、居場所や活躍する出番をまちコミでつくることが大事。

●どのようなきっかけで‘まちづくり’に関わっていったのか？

（清水）

・愛媛大学の地理学ゼミで、自分から「まちづくりをやりたい」と言っていたら、市役所の人に声を掛けられて、清水地区にまち協が出来るからやってみないかと言われたのがきっかけ。

（Ｍｕｓｅ）

・大学に入学したときに、何かしたいなというのがあった。高校生のときから、清掃活動やボランティアが好きだった。

・地域の活性化を目指してＭｕｓｅに入ったのではなくて、何かできることをしたいなと思って入った。

（桑原）※司会

・将来、過疎化の進む地元の宇和島に戻ってにぎやかにしたいと思っていたところ、桑原まち協の事務局長から案内があって参加することになった。
・もともと、まちづくりに興味はなかったが、将来、教員を目指しており、桑原にある小学校や中学校にまち協を通じて関わることができるのではと参加した。

●まち協に関わって自分が変わったところ、得られたもの、成長できたこととは？

（桑原）※司会
・市外出身だが、まちづくりを通じて、桑原を「うちのまち」と思えるようになったことが一番。
（清水）
・いろんな人とコミュニケーションをとることができるようになったこと。
・最初は観光で人を呼んでくるようなことがまちづくりだと思っていたが、まち協と関わってから、人と人とのつながりや、住民と住民のコミュニケーションを大事にして、みんなでまちのことを決めていくことが本当のまちづくりで、それを大事にするための手段として観光などがあることがわかった。
（Ｍｕｓｅ）
・高校生までは、多くの人と関わりたいと思ってなかったが、活動を通じて、いろんな場所に行き、地元の人と関わったりすることで、楽しいと感じるようになった。
・地域活動で関わる人は、年齢が上の人が多い。

●自分の地区では若い人たちにこんなことを求めたい

（若松アドバイザー）

・会場の人たちは、たぶん桑原や清水には大学があって良いなと思っている。しかし、私のまち双海には、大学はおろか高校もない。でも、しっかり情報発信をして、どんなことをして、学生にどんなことを求めているか明確にすれば離れていても学生は来る。
・まち協が学生に何を求めるか、学生は地域で何ができるのか、お互いが必要としている理論を出し合っていく。
・また、まち協と学生をつなぐ部分がないので、誰に言ったら良いのかわからい。これが、これからの課題となる。
・パートナーシップに基づいて、一緒に活動を重ね、関わりをつくっていくことが大切。
（讃岐アドバイザー）
・学生に参加してもらうと良い面が３つある。
　１つ目は、学生はいろんな地域から来ている。様々な文化圏から来ているため視点が多い。
　２つ目は、学生の特技や専門性が活かせる。
　３つ目は、サークルに依頼した場合、後輩へ受け継がれ、

継続的に参加してもらえる。

・対等でないといけない。労働者のように「使う」ということではだめ。

・学生との関わりについて以下の原則がある。

１つ目は「学生の主体性（意志）を大事にする」

２つ目は「対等の原則（地域も学生も主役）」

３つ目は「目標（ビジョン）の共有化」

４つ目は「話し合いの原則」※同じテーマについて情報交換（メリット・デメリット・負担等）

５つ目は「自立化」自分で企画立案。誰かが創ったものを受けるのは面白くない。

６つ目は「情報公開の原則」

７つ目は「時限立法」

●まちづくりに関わることになった、きっかけをもう少し詳しく

（清水）

・大学のゼミの飲み会で「まちづくりやりたい」と言っていると、市職員に誘われて、清水まち協に関わるようになった。

・他の学生は、自分が金沢に視察に行った報告をした際、４０人ほど集まった。その際、１０人ほど仲間ができた。

・使命感から、「これやって、あれやって」と仲間の学生にまちづくりを押し付けたため、全員が４月に辞めた。

・フェイスブック等で情報収集し、いろんなイベントなどに出向いて、「まちづくりやりたい」と言ってきた結果、４人の仲間が集まったが、学生を集めるのは大変。

●活動したい人と求めている人とのつなぎ

（Ｍｕｓｅ）

・地域から大学に依頼があれば、大学を通じて依頼を受けるか、事務所に直接話がある。

（堀江）

・地域として、学生にどういうことを求めたいかということを考えたい。

●今までの話を通じての意見

（会場）

・私自身も桑原まち協の学生部に参加している。情報がなければ学生は動けない。自分がやりたいことなら学生は出向く。

・自分たちの持っている知識を活かすため、小学生の自由研究を企画した。これは、自分たちが考

えたものだが、依頼される場合は、何をやって欲しいのか、こういう能力が欲しいと言ってくれたら良いと思った。

（会場）

・これまでの話で、現場までタクシーで行くなど、経済的な負担が掛かると思うが、Ｍｕｓｅにおいて資金源はあるか。また、地域に呼ぶ場合、どのくらい経費が必要か。

（Ｍｕｓｅ）

・費用面はメンバーの会費やＯＢからの寄付金とこれまでの貯金。大学に申請すれば、経費が認められる場合や、地域の人が負担してくれるなど、いろんなケースがある。

・お金の面は、金村所長と大学や地域が話し合いで決めるため、学生は関わっていない。

●これからの抱負

（堀江）

・とにかく継続が必要。将来、大きな成果を期待している。今後、学生には何をして欲しいのかを決めることが今回分かったので参考にしたい。

（清水）

・自分のために活動している人が多いという指摘もあったが、最初はそれでも良いと思う。まちづくりをしていく中で、学生も住民も少しずつ巻き込んでいきたい。

・今は、自分勝手にまちづくりをしているが、これからちょっとずつでもこの活動が大きくなっていったら、最後はみんなでまちづくりができると思う。

（Ｍｕｓｅ）

・約１００名のメンバーのうち、積極的に活動しているのは５０名弱。残りの人をどう巻き込んでいくかが一番の課題。

・これからも後輩が入ってくるが、受け継いできたポリシーを引き継いでもらえるようにしたい。

（桑原）※司会

・昨年の１１月に出来たばかりなので、今回の大会を参考に今後は取り組んでいきたい。

・我々のメンバーは方向性がバラバラでまとまっていない。そのような中でも、桑原地区のことを「うちの地区」と言えるように導いてくれる、桑原の地域の人はすごいなと思う。

（若松アドバイザー）

・堀江地区でまちづくりが始まって１０年という報告があった。準備会も入れると２１のまちづくり協議会が設立し、この松山にまちづくりの根がはりつつあることを嬉しく思う。

・若者には爆発力がある。３つあるが、「楽しいこと」「新しいこと」「美しいこと」をしなければならない。これを考えていると、これは若者だけのことだけではなく、まち協もパワーをアップしていくためには必要。

・１０年を区切りにして、これから新たに２０周年に向かってくため、若者が求めていくものイコ

ール、まち協も求めていくという姿勢が必要だと思う。

・これからパワーアップしていくには、いきなりは出来ないので１ランクアップすることを考えていかなければならない。

・１００人まち協に関わるとすれば、ゴミに例えて悪いが、５０人は不燃人で何回言ってもやらない。３５人が可燃人で言えばやるという人。１０人が自燃人と呼び、言わなくてもする人。もっとすごい人は、類燃人で、自分が動いて周りを燃やすという人。１０周年を迎えるにあたり、不燃人はほっとけと放任していたのではないか。この人たちを１ランクアップしなければならない。

・桑原の朝山事務局長が学生に声を掛けていったように、今日集まった皆さんが一人ひとり声を掛けてみよう。そうしなければ、不燃人は可燃人にならない。

(讃岐アドバイザー)

・堀江地区はよくやっている。大人について、一人前ではない子どもたちが見よう見まねでついてきて学ぶ。落語も弟子にほとんど教えてくれない。師匠を見て学ぶ。これが正統的周辺参加理論。

・若い人たちは、一人前の活動をしてくれないかもしれない。しかし、だんだん「ああすれば良いんか」ということが自然に身に付いていく。

・「つなぐ」という世界には「集う」ことがある。この前には、郷土愛を「培う」ということがある。「培う」「集う」「つなぐ」があって、その次に「つくる」ということがある。この４つをどうしていくかを整理しないといけない。

(前田アドバイザー)

・若い人の参画を促すときに、呼びかけが必要で、その際には何を助けて欲しいのかということを発信していくことが大事。

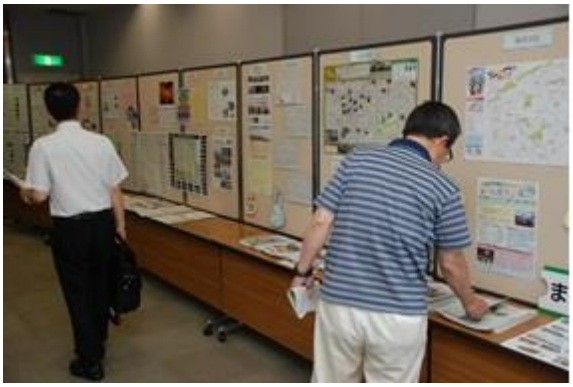
・助けを受ける力「受援力」を身に付ける。

・若い人だけでなく、多様な人に助けを求めることが大切。

・今日の大会が皆さんのパワーアップにつながりますように。

７．閉会挨拶（西泉副市長）

【当日写真】



まち協 PR ブース

会場内の様子